

京大植物園 続く混乱

運営方針、研究・見学に支障との批判

ここがポイント

北部キャンパスの東部に一九三三年に設置されて以来、学内外の人々により研究・教育の場として広く利用されてきた京大植物園。二〇〇二年より続く植物園の管理運営を巡る混乱は〇四年も収束を見なかった。

植物園を巡る混乱の一つが除草剤散布問題である。〇四年三月中旬、前年に続き植物園内の圃場まわりや温室の窓下に除草剤が散布された。これは植物

園管理運営委員会(※一)の会議を経た決定ではなかったが、同委員会委員長岡田清孝氏(植物学教室)によると、除草剤散布は圃場の研究目的利用のための毎年恒例の圃場管理作業であり、委員会の許可は必要はない、また散布量も必要最小限量であったという。運営委員会のホームページでも除草剤散布について「圃場は植物学教室教員の研究材料である作物を栽培することを目的としており、自然に近い状況を維持することを目的とする林間部と圃場とは異なった利用目的を持っている。林間部と圃場とは明確に区別されて(いる)」としている。

実際は、圃場は植物園の中央部に位置し、林間部との区切りはなく隣接している。長年植物園に携わった研究者や園丁、京大植物園を考える会(※三)などからは、圃場管理のための除草剤散布の影響が極小であるという科学的根拠が示されていないことからその妥当性を疑問視する声があがっている。

さらに問題となっているのが利用規定の改訂についてである。〇三年四月から毎月下旬に、学内及び学外者のために「考える会」主催の観察会が行われている。しかし昨年五月二十二日(土)と六月二十七日(日)に予定された観察会は、運営委員会による許可がおりなかった。運営委員会は、休日の見学を認めていない植物園利用規定をその根拠

としている。運営委員会発足後の〇三年十月から利用規定が大きく変わった。土日・祭日・その他の京都大学が指示する休日は見学を受け付けないことが明記された他、学外者の利用申請についてはその目的を見学と研究に分類し、見学目的の場合には京大職員を紹介者として記入する。申請手順は複雑になったと言え

るが、運営委員会はそれまでの植物園利用に関するさまざまな点を是正するためとしている。今年度から大学法人化に伴って昼休みが十五分短縮されたために、昼休みを利用した学内者の植物園見学が難しくなると、休日開催の要望、参加者の増加などを理由に「考える会」は休日開催を企画した。

また観察会の他に、京大農学部生が京大教員を指導員に迎え申請した、植物園の樹木の種目確認と胸高・樹高の測定調査は、林間部に踏み込み林床や動植物がダメージを与える、学外の試験地で行うようにと岡田清孝委員長より指示され、却下されている。自然状態に近く保たれてきた植物園では、林間部でのフィール

ドワークで数多くの研究成果を上げられている。〇四年十二月には、複数の植物園利用者が尾池総長に、運営委員会の運営方針によって研究や見学に支障を来したとして意見書を提出している。総長は本紙取材に対し、研究科に介入すべきとした。

する意思はなく部局の自治を重視するという姿勢を示した。その上で、植物園が京大内外の研究に果たしている役割を指摘、植物園を研究施設としてどのように位置付けるのか、理学研究科が中期目標・計画に明記

されるようになった。(今年三月下旬日曜日撮影)



京大植物園の門。利用規約の改定により、土日は施錠されるようになった。(今年三月下旬日曜日撮影)

ダイジェスト + α

植物園問題

求められる 将来像の議論

○三年に運営委員会が主張してきた。多くの討議を経て合意されたこと。利用している農学研究科や植物生態学の専門家など学内外から広く意見を求める「植物園将来計画委員会(仮称)を併設することが理学研究科で合意されている。管理運営の実務を行う運営委員会だけでは不十分である。植物園の研究・教育に果たすべき役割や将来像を根本的に論議する場が必要」との指摘を考慮したものが、立ち上げの気配はまだない。○三年度運営委員の堀道雄教授(動物学教室)は「運営委員会には、動物生態学、植物系統分類学、ミクロ分野の植物学の専門家しかいない。研究科にない現状で植物園を運営するのは無理があり、将来計画委員会が必要と

用語解説

*一 ナチュラ
ルローンセル
クシヨン:コン
ビニエンス
ア、ローンの
新しい店舗の形
態で、無添加商
品などを充実さ
せ、環境と健康に配慮した
コンビニを目指す。

*二 植物園管理運営委員会:○三年八月に、植物学教室から理学研究科に植物園の管理主体が移され、研究科全体から教員が参加して発足した。○四年度の委員は、委員長の岡田清孝氏(植物学教室)や副委員長の曾田貞滋氏(動物学教室)をはじめとする七人である。

*三 京大植物園を考える会:○二年十月より行われた植物園内における樹木伐採を契機に、○三年四月に学内外の有志によって設立された。代表は京大名誉教授の河野昭一氏と川那部浩哉氏。

*四 管理主体が二転三転した:京大植物園は、理学部植物学科初代教授那場寛氏が、単に珍しい植物を集めた栽培園ではなく生態学的特色を持ったものにしようという構想のもとに一九二三年設立。以後、植物学教室が管理してきたが、理学部附属植物生態研究施設(現、生態学研究センター)ができることが管理にあたった。同施設が京大外に移転したことで、○三年に運営委員会が発足するまで、管理主体は植物学教室に戻っていた。